

「プロは兵站を語り、素人は戦略を語る」

石津朋之

防衛省 防衛研究所 戦史部第一戦史研究室長

古来から戦争のあり方は「戦略」よりも「補給の限界」によって規定されてきた。近代の技術力の発展は軍隊の補給能力を飛躍的に向上させた。しかし、国家の正規軍同士の戦争を前提とした従来のロジスティクスは今日効力を失いつつある。対テロ戦争に適應した新しいロジスティクスが模索されている。

(聞き手・大矢昌浩)

補給が戦略を規定する

——戦史家のマーチン・ファン・クレフェルトの著作「補給戦—何が勝敗を決定するのか」(中央公論新社)の解説文で、石津先生は「戦争のプロは兵站を語り、素人は戦略を語る」という言葉を紹介されています。これは広く知られた言い回しなのでしょうか。

「種明かしをしますと、言葉そのものを作ったのは実は私なんです。ただし、勝手に作ったわけではなくて、従来からそうしたことが言われてきたのは事実です。湾岸戦争やイラク戦争の時でもそうでしたが、テレビやマスコミでは最前線での戦闘の場面ばかりがクローズアップされ、イラクまで軍隊を進めて兵士たちにメシを食わせ、水を飲ませ、必要な

弾薬を補給するという単純だが極めて重要な仕事はあまり注目されない」

「しかし現実には兵站が崩れてしまえば、いかに世界最強のアメリカ軍といえども、ほとんど戦えなくなります。そのことにはある程度戦争の実相を知っている人であれば分かることなのですが、軍隊の内部にあつてさえ、ロジ周りの仕事はあまり目立たない。そのためにロジ担当者たちは『俺たちがいなくなったら何もできないんだぞ』という誇りは持っているところがある。そうした人たちとの会話の中から『戦争のプロは』という言い回しを思いついたのであつて、グチ半分ではありますが、その意味するところは古来から軍事関係者にとつての共通認識だと言えます」

——「補給戦」のなかでクレフェルト



トは、「戦略」よりもずっと「兵站」のほうが重要だ、戦争という仕事の10分の九までは兵站だと言いつつ切っています。

「かなり誇張を含んだ言い方だとは思いますが、少なくとも戦争の半分は兵站だと言つても嘘ではないはず。著者が『補給戦』で言わんとしているのは、戦争のやり方だとか戦略というものを最終的に決めているのは、孫子やクラウゼヴィッツに代表されるような戦略思想というよりも、むしろ『補給の限界』なんだということですが、それは歴史的な事実です」

「『戦略』を作るといふ仕事を、真っ白なカンヴァスに絵を描くように考えている人がかなりいます。ビジネスであれば経営トップが目標を決めて、それに向かってトップダウン

ンで戦略を各レベルに落とし込んでいく。確かにそれは外から見ていると理解しやすいし、格好いい。しかし戦略家が地図を広げて、どれだけ壮大な構想を練ろうが、所詮それはデイドリームに過ぎません。現実には戦争の場所や時期、規模を規定してきたのは補給上の制約でした。端的に言えば、兵士として活動するのに必要な一日当たり三〇〇〇キロカロリーの食糧をどれだけ前線に運べるか、その実現可能性が軍隊の行動を規定してきたんです」

——補給の限界は時代と共に変化しますね。

「古戦場の場所を地図上で確認していくと、ほとんどが河川の近くであることに気がきます。大量の兵士や物資を運ぶには昔は河川や運河を使うしかなかった。河川沿いに補給基地を設けて、そこから行動できるエリアのなかで戦争を行うしかありませんでした。近代の戦争を変えた一つのターニングポイントは鉄道でした。大量の人員や大量の物資を絶えることなく内陸部に運び込める。しかも前線で傷付いた兵士をすばやく後方に送り、治療を受けさせることができるようになった。その後のトラックの登場によつても、やはり戦争のかたちは変わりました」

「技術革新は今も続いています。湾岸戦争の時には前線に送られてきたコンテナに何が入っているのか、開梱するまで分からなかった。水が必要なのに開けてみたら食糧しかなかった、違う種類の弾薬が届いた、といったことが頻繁に起きていたそうです。それが約一〇年後のイラク戦争ではコンテナにRFIDが装備されて、何がどこにあるのかシステムで把握できるようになった。必要な物資を必要な場所へ送ることができるようになった。そうした技術力を無視して今日の戦争は戦えません」

「イラク戦争では軍事ロジスティクスのアウトソーシングも進んだと。その最も大きな理由は、大量の物資を遠く海外に運ぶノウハウは民間のほうが優れていたからです。そのため現在でもアメリカ軍は民間のノウハウを自らの機能として取り込もうと懸命に学んでいます。日本の自衛隊も民間の物流会社との人的交流などを通して、災害派遣や災害援助のノウハウの獲得を図っていると聞いています」

「冷戦以降の戦争は、テロとの戦いという様相を呈しています。国家間戦争のロジスティクスが通用しなくなっています。」「そのことが現在、軍事上の大問題

「任務戦術」の再評価

の一つになっています。正規軍同士の戦争では相手の居場所が特定できるので、戦場がどこになるか、そのために補給線をどう引くべきか、ある程度予測できた。しかし、対テロ戦では戦場がどこになるのか分からない。そのため、アメリカ軍は現在、必要な物資をできる限り自分たちで持つていく方向に動いているようです」

「ビジネスで言えば、商物分離が改めて、商物一体に動いていることになりましたね。それと並行して、突発的なテロ攻撃に素早く対応するために、現場への権限委譲が必要になりませんか。ビジネスの世界では、そのことを「アダプティブ（適応力）」というキーワードで表現しています。が、オリジナルはイギリス軍の対テロ戦略だと聞いたことがあります。」

「それは湾岸戦争やコソボ紛争でのイギリス軍の経験、さらにはイギリスの退役軍人ルパート・スミスなどの考え方を発展させたものだと思いますが、残念ながらアダプティブについては私は詳しいことは知りません。ただし現場への権限委譲に関しては、『任務戦術』、ドイツ語で『アウトトラークス・タクティク』と呼ばれるやり方があります。泥沼の肉弾戦に陥っ

ていた第一次世界大戦末期に、ドイツ軍が編み出した戦術ですが、今になって改めて注目されています」

「当時のドイツ軍は、敵の最前線を密かに突破して敵陣の内部深くに進入し、小規模な部隊での分散行動によって敵を背後や側面から攻撃して攪乱する『浸透戦術』と呼ばれる作戦をとりました。そして浸透戦術を実行するために権限を下位の部隊に委譲した。指揮官は作戦目標と方針だけを示して、任務を実行する方法は現場のリーダーの判断に任せました。敵陣に潜入した部隊は本体と連絡が切れてしましますから、そういうしないと行動できなかった」

「現在の軍隊は、現場の情報がありアルタイムで中央でも把握できるようになっています。それでもアメリカ軍は任務戦術のモデルを採り入れて現場への権限委譲を進めていると聞きます。狙いの一つはもちろんテロ対策です。戦闘が始まっているのに、いちいち本部にお伺いを立てていたら対応が後手に回ってしまふ」

「それと同時に、中央から現場がよく見えるようになったことで、逆に現場の判断を尊重する必要性が改めて認識されたのではないかと私は考えています。クラウゼヴィッツは『戦争論』のなかで、机上の計画と

現実の闘いとの違いを『摩擦』と名付けました。気象条件や兵士の疲労度など、事前に予測することのできない要素が、戦争の勝敗には大きく影響する。その最たるものが『摩擦』であって、『戦争は摩擦に満ちている』と彼は表現しています」

「そして『摩擦』に打ち克つには、インスピレーションや使命感、リーダーシップを備えた指揮官が必要であり、クラウゼヴィッツはそれを『軍事的天才』と呼びました。この『戦争論』という本によってクラウゼヴィッツは後に史上最高の戦略思想家と言われるわけですが、民間のビジネスに携わっている方であれば、摩擦に満ちた現場での判断がどれだけ重要なのか、本能的にも理解されているのではないのでしょうか」

＊本インタビューは石津氏個人の見解であり、所属組織の意見・方針とは無関係です。

いづ・ともゆき 1991年、ロンドン大学キングス・カレッジ大学院修了。93年、防衛庁防衛研究所入所。99年、オックスフォード大学大学院研究科修了。ロンドン大学キングス・カレッジ戦争研究学部名誉客員研究員、英国王立統合軍防衛安保管問題研究所客員研究員などを歴任。専門は戦争研究、ヨーロッパ戦争史、戦略思想史。「リデルハートとリベラルな戦争観」（中央公論新社）、「名著で学ぶ戦争論」（日本経済新聞出版社）、「戦略原論」（同）など論文著書多数。